

# 大安寺の2つの新発見

—金堂と埋壙遺構—

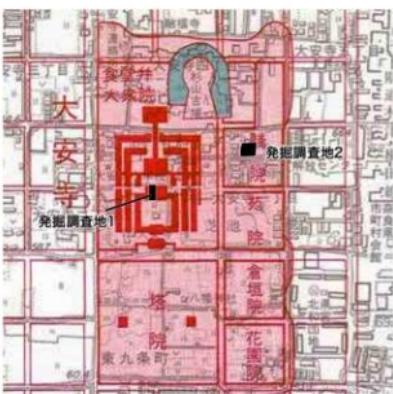
史跡大安寺旧境内で行われた、2件の小規模な発掘調査の重要な発見を紹介します。

## 大安寺金堂の発見（発掘調査地1）

大安寺の伽藍は、南から南大門・中門・金堂・講堂が南北に並び、その東西と北側を僧坊がコの字形に囲います。さらに南大門南側には、東西2つの塔があります。これら主要建物のうち、発掘調査で未確認だった唯一の建物の金堂が、今回初めて発見されました。

金堂中央のやや西よりで、南北方向に幅約2mの発掘区を2箇所設けて長さ延べ約17mを調査した結果、金堂の基壇北端を確認しました。基壇は高さ約1.0m分が残存し、凝灰岩製の地覆石と羽目石を確認しましたが、礎石やその据付坑は未確認です。また金堂基壇南端も確認出来ず、正確な基壇の南北方向の規模は不明です。基壇は、上から0.5m分が厚さ0.05～0.1mずつ土を積上げて築かれ、その下は更に堅く締まった盛土となります。基壇北側は盛土が緩やかに北に下降するだけで、雨落ち溝等の外構施設は見つかっていません。この盛土直上に寛仁元年（1017年）の火災の炭層と焼土層が厚さ約0.25m堆積します。

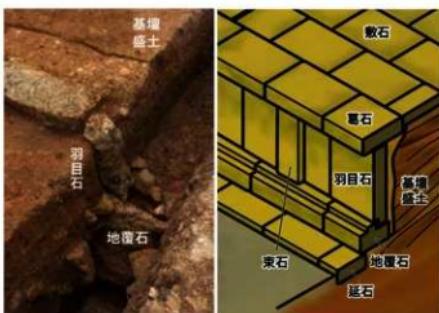
凝灰岩の羽目石は高さ約0.4m分が残りますが、厚さは0.1～0.2mと不揃いです。その下の地覆石は幅・高さとも約0.35mの石材で、外側は風化により角が失われています。また地覆石の



調査位置図 (1/10,000)



調査地1 全景（北から）



見つけた基壇（左）と壇上積基壇模式図（右）

下には延石が見つかっていません。このように大安寺の他の諸堂の発掘調査で見つかっている壇上積基壇に比べるとかなり貧相で、創建後に基壇の改修が行われた可能性が考えられます。

### 埋甕遺構の発見（調査地2）

大安寺主要伽藍の東側地区は、従来「賤院」とされていましたが、近年の調査成果から「禪院食堂并太衆院」の候補地として注目されています。

発掘調査の結果、径0.4～0.8mの円形の土坑が28基見つかり、東西6列、南北12列以上、計72個以上の土坑が整然と並ぶ様子が復原出来ます。従来の平城京内の発掘調査成果から、このような遺構は須恵器の大甕を据付けた土坑と考えられ、埋甕遺構と呼ばれます。多くは大甕を抜き取った跡ですが、西大寺跡では据付けた甕の底部が土坑内に残存していました。今回の調査では、据付けた甕は残存しませんが、坑内からは須恵器の大甕の破片が多数出土しました。また、埋甕遺構の東側約1.5mには、幅約1.3m、深さ0.2～0.3mの南北方向の溝があり、埋甕遺構の東端を示す遺構と考えられます。

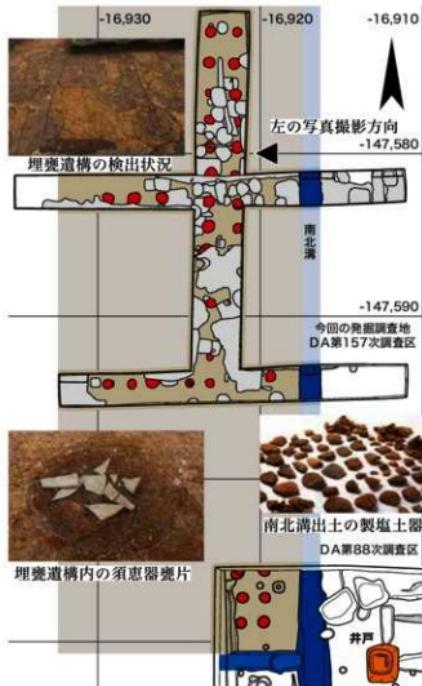
調査地南側の発掘調査でも、今回の遺構の延長線上に同様の土坑と溝が確認されており、埋甕遺構の規模は東西10m以上、南北36m以上あると想定されます。

### 出土遺物から

調査地2出土の須恵器甕は、復原口径が約48cmあり、容量約200ℓの大甕と想定されます。埋甕遺構の72個全部の大甕を満たすと、約14t（大型タンクローリー1台分）の水が貯蔵できます。また東側の南北溝等からは、製塙土器が多数出土します。海岸部から塙を詰めて運ばれてきた製塙土器が、塙を取出後に廃棄されたと考えられます。大量の液体の貯蔵と塙の消費から、当地が大安寺内での食事に深く関わった地区と考えられ、今後の調査の進展が待たれます。

この他特筆できる遺物に、調査地1で出土した我が国最古級の巴紋軒丸瓦があります。

これは同範（同じ本型で紋様をつけた）瓦が長谷寺観音堂で出土しており、長谷寺では天喜2年（1054）に再建された観音堂に葺かれたものと考えられています。大安寺金堂は長元8年（1035）



調査地2平面図（1/300 図中の赤丸が埋甕遺構）

に再建されており、ここに葺かれたものとみられます。今後両者の比較検討が必要ですが、いずれにせよ我が国最古級の巴紋軒丸瓦とみられます。

巴紋とはいって、蓮華紋の中央（中房部分）に巴紋を飾るものです。

仏教世界においては、蓮華は天空を漂いながら、光り輝く光明の象徴で、天人が蓮華から誕生する「蓮華化生」という思想があります。

のことから、こ

の紋様は仏教における蓮華化生をあらわしたもので、巴紋は蓮華が中央から光を放ちながら旋回する様子をあらわしているとの見方が有力です。



巴紋軒丸瓦